

構造化抄録フォーム

番号	4_2_list_18
タイトル	Implant Reconstruction of the Bone Grafted Maxilla: Review of the Literature and Presentation of 8 Cases
著者名	Clayman L
雑誌 年;巻:頁	J Oral Maxillofac Surg 2006;64(4):674-682
目的	著しく骨量の減少した上顎骨を再建するための腸骨稜移植とそれに続くオッセオインテグレートインプラントの埋入に対する長期観察
研究デザイン	<input type="checkbox"/> meta-analysis <input type="checkbox"/> systematic review <input type="checkbox"/> DB-RCT <input type="checkbox"/> RCT <input type="checkbox"/> CCT <input checked="" type="checkbox"/> cohort study <input type="checkbox"/> case control study <input type="checkbox"/> case series <input type="checkbox"/> case report <input type="checkbox"/> others
研究施設	OMS Service, Sinai Grace Hospital, Detroit Medical Center, Detroit,
対象患者	継続的に見た、年齢が 18 から 69 歳まで (平均 49.6 歳) の 8 人の患者 (女性 7、男性 1)
介入・検査	Orthopantomograms and occlusal radiographs
評価項目	長さ 7~15mm と直径が 3.75mm の 41 本の Branemark インプラントを移植して 6 ヶ月後に埋入した。臨床試験および X 線撮影により骨の治癒、骨の高さの維持、インプラントの安定性を測定
統計手法	
結果	ある患者は、補綴治療に移行して 24 ヶ月(2年)で脱落し、またある患者は 75 ヶ月(約 6 年)で脱落した。インプラント体に補綴物を装着してからの経過観察の期間の平均は 90.5 ヶ月(約 7.5 年)であり、最長 154 ヶ月(約 12 年)であった。41 本のインプラントのうち 34 本(83%)が観察期間終了後も残存した。失敗したインプラントの 6 本のうち 4 本は、7mm の長さで、他の 2 本は 10mm であった。10mm のうちの 1 本は位置決めが悪く(唇側に寄りすぎた)、落ち着かなかった。補綴物は全て残存した。1 本は有意に歯肉に感染があった。インプラント体安定後も 1.5mm の骨の減少があった。この研究の期間においては 0.5mm 以上の骨稜減少はインプラント体との関連はなかった。
尤度比 Odds 比	
結論	上顎骨へのオッセオインテグレートインプラントの埋入は腸骨の移植によって顎堤が増大し、長期間の成功につながる。 7mm のインプラントは、失敗するリスクが 40%で 10mm またはそれ以上の長さのインプラントと比較すると 9.5%増加していた。
コメント	
記載者	庄司 憲明